

## 本部御殿手ウェークの手

解説、本部御殿手真武館、多和田真吉

本部御殿手の修行は、素手の術から始めて、武器の術へと進み、再び素手の術へと戻ります。突きと蹴りを主体とした体術で身体を練り、それを基礎として各種武器を使いこなす技を身に付けることとなります。本部御殿手では二十種類以上の武器を使用しますが、武器の種類は異なっても、基本的には同じ動きで使いこなし、相手を捌いていきます。武器術を習得しますと、次にさらに高度な体術の修行に入ります。関節技、投げ技、固め技などを淀みなく流れるような動きの中で繰り出していく「取手」と呼ばれる技で、どのような武器を持った相手でも、傷を負わせることなく取り押さえ、抵抗できない状態にしてしまいます。これらの技がすべて沖縄の古典女踊りの動きに技術が秘められているということで、最終的には武の舞という境地に至るという事であります。本部御殿手は技法的にも中国由来の武術とは異なっており、また、刀、槍、薙刀などの技法も日本本土の古武術と類似のものは含まれておりません。そのため技の名称も武器の技法もすべて沖縄の方言が使われております。

すべて武術は基本が大切ですが、本部御殿手では「元手<sup>もとてい</sup>」が基本となっております。一見、剛柔流や上地流の三戦に似ていますが、目的ははっきりと異なっております。本部朝勇先生から上原清吉先生への極意相伝として28首の「琉歌」が残されております。元手については教訓歌として「元手元なちよて 技よ積み重に 奥手舞方や 頂に乗せて」という歌が残されております。この歌の意味は、御殿手の技は元手の剛拳を基に技を積み重ねて、奥義の武の舞を最高の秘伝として、武の頂点に乗せ継承していくものという事があります。また、「風にうちなびく 若竹のごとく 技やむちむちと 軽くかわし」という教訓歌もありますが、この歌の意味は、相手の力に抵抗せず逆らわず、しなやかに柔軟性をもって、武の技は無心に向け、相手をかかわしていきなさいという意味であります。

今日は、各種武器術の中から漁師がサバニを漕ぐときに使用する「ウェークの手」を喜納5段に演武してもらいます。サバニを漕ぐウェークの切り返しや、手さばきの動作、これに足さばきを加えると武術の動きとなります。御殿手ウェークの特徴として、空手の突きや蹴りのような直線的な動きに対し、円運動を主体とした回転の遠心力から生じる破壊力により相手を制し、前後左右、四方八方の多人数の相手との地上での戦い、また、馬上からの攻撃を含めた技法となっております。

それでは、喜納さん 宜しくお願いします。